



Title	日→英翻訳の問題点を考える：なぜ日本語小説の英訳では直接話法が間接話法に転換される場合があるのか
Author(s)	小倉，慶郎
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2013, 11, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50796
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日→英翻訳の問題点を考える

—なぜ日本語小説の英訳では直接話法が間接話法に転換される場合があるのか—

小倉 慶郎

【要旨】

筆者の日→英翻訳の授業では、さまざまなジャンルの翻訳を扱う。小説の翻訳では著名な日本人作家の文学作品を扱ってきた。授業では、学生が各自の英訳を発表したあと、プロの翻訳家による英訳の実例を検討する。その時に決まってぶつかるのが、日本語の直接話法が、間接話法で英訳されている例である。授業では、事実を簡潔に指摘するだけにとどめているが、学生は意外な事実、最初は首を傾げている。それでも、教材で2度3度同じ事例にぶつかるのと少しずつ納得していき、中には直接話法→間接話法の英訳を上手にこなす者も出てくる。しかしいったいなぜこのような現象が起きるのだろうか。その理由を、授業でも扱った実際の英訳の事例を中心に考えてみたい。日→英翻訳家にとっては自明と考えられる現象ではあるが、留学生への説明という観点から、この現象が発生する理由を考察したい。結論として、この現象を引き起こす最大の理由は、日本語の話し言葉のユニークな特徴にあると筆者は考える。

はじめに

筆者の翻訳の授業では、英→日は扱わずに日→英翻訳のみに限定している。留学生が受講できる授業で、日→英翻訳を扱う授業がまず無いこともあるが、彼らが大学卒業後に接する実務のことも考慮しているからだ。私の知る限りでは、彼らが企業等に就職した際、日→英ないし日本語→母語への翻訳を担当することが圧倒的に多い。そうした実務上の理由から日→英翻訳のみに限定しているのである。

授業では、留学生の需要に合わせてさまざまなジャンルの翻訳を扱うが、数回ではあるが必ず日本語小説も扱うことにしている。題材となる小説の作家は、村上春樹、川端康成、太宰治、芥川龍之介などである¹⁾。授業では、学生が各自の英訳を発表したあと、プロの翻訳家による英訳の実例を検討する。そうしてプロの翻訳家の工夫を見ていくのである。その時に決まってぶつかるのが、日本語の直接話法が、英語では間接話法で訳されている例である²⁾。もちろんすべての直接話法が間接話法に英訳されるわけではない。しかし、時折この現象が起きるのは、日本語から英語に翻訳された文学作品を研究する専門家や翻訳家にとっては自明な現象とていい。授業では、時間の都合もあり「日本語の直接話法は、時々間接話法に英訳されることがあるから、覚えておくといい」と事実を簡潔に指摘するだけにとどめている。学生は初めて聞いた事実に、「なぜだろう」と最初は首を傾げている。しかし、教材で2度3度同じ事例にぶつかるのと、「やはりそうなのか」あるいは「この方が英語として自然になるな」と考えてか少しずつ納得した顔つきに変わっていく。中には日本語の直接話法→英語の間接話法の訳を上手にこなす者も出てくる。

本稿では、この現象が起きる理由を考察したい。なぜ日本語の小説を英語に翻訳した時、話法の使用に違いが生じることがあるのだろうか。それは英語に起因するものなのか、日本語に起因するものなのか。あるいはまた別の理由があるのだろうか。

筆者が今までに投稿した『授業研究』の論文と同様、本稿でも留学生へ説明するという視点

から、この問題を考察したいと思う。

1. 日本語小説英訳の実例

では授業で使用している実例を見てもらいたい。まずは川端康成の『雪国』の冒頭部分である（以下、下線はすべて筆者がつけたもの）。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。
向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落とした。雪の冷気が流れ込んだ。
娘は窓いっぱいに乗り出して、遠くへ叫ぶように、
「駅長さあん、駅長さあん。」

明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.

A girl who had been sitting on the other side of the car came over and opened the window in front of Shimamura. The snowy cold poured in. Leaning far out the window, the girl called to the station master as though he were a great distance away.

The station master walked slowly over the snow, a lantern in his hand. His face was buried to the nose in a muffler, and the flaps of his cap were turned down over his ears.

translated by Edward G. Seidensticker

日本語の原文では「駅長さあん、駅長さあん。」と直接話法であるのに、英訳では間接話法に転換されている。日本文をそのまま英語に訳せば“Station master! Station master!”となるだろう。事実ほとんどの学生はこのように直訳する。なぜこの呼びかけを間接話法にしてしまったのだろうか。下線部の英語を念のため日本語に訳しておこう。「少女は、窓から身を大きく乗り出して、駅長に向かって、まるで彼が遠くにいるかのように叫んだ」。

次は太宰治『斜陽』の一部である。『斜陽』はご存じの通り戦後の没落貴族の話であり、父を失ったかず子と母が東京から伊豆へ移り住む。母親が発熱し地元の医者呼んだ場面である。

お昼すこし前に、下の村の先生がまた見えられた。こんどはお袴は着けていなかったが、白足袋は、やはりはいておられた。

「入院したほうが、……」

と私が申し上げたら、

「いや、その必要は、ございませんでしょう。きょうは一つ、強いお注射をしてさし上げますから、お熱もさがる事でしょう」

と、相変らずたより無いようなお返事で、そうして、^{いわゆる}所謂その強い注射をしてお帰りになられた。

A little before noon the doctor appeared again. This time he was in slightly less formal attire, but he still wore his white gloves.

I suggested that it might perhaps be better if Mother went to the hospital. “No,” the doctor said, “I do not believe it to be necessary. Today I shall administer a strong injection, and the fever will probably abate.” His answer was just as unreassuring as the previous time and he went away as soon as he had finished giving Mother the “strong injection.”

translated by Donald Keene

これも「入院した方が、……」という直接話法の部分が、伝達部 I suggested を加えて間接話法に変えられている。直接話法で、“It might perhaps be better for her to go to the hospital.” と訳してもよさそうなところである。なぜなのだろうか。

もうひとつ例を挙げよう。以下は村上春樹「パン屋再襲撃」の一節である。真夜中すぎに急に飢餓感に襲われた新婚夫婦が、東京の街に車を走らせてパン屋を探す。しかし深夜に開いているパン屋が見つかるはずもなく、代わりにマクドナルドを襲った場面。

妻はそれからポケットから荷造り用の細引きの紐をとりだし — 彼女は何でも持っているのだ — 三人の体をボタンでもぬいつけるみたいに要領よく柱に縛りつけた。三人はもう何を言っても無益だと悟ったらしく、黙ってされるがままになっていた³⁾。妻が、「痛くない？」とか「トイレに行きたくない？」とか訊いても彼らはひとことも口をきかなかった。

My wife then pulled a ball of twine from her pocket—she came equipped—and tied the three to a post as expertly as if she were sewing on buttons. She asked if the cord hurt, or if anyone wanted to go to the toilet, but no one said a word.

translated by Jay Rubin

この場合もやはり、直訳すれば、“Does the cord hurt?” “Does anyone want to go to the toilet?” などと直接話法となるはずのところが she asked という伝達部を加えた間接話法になっている。

いま引用した3例はすべて作者が違い訳者も違う。ここでは授業で扱う教材からわずかな例を挙げただけだが、日本語小説の英訳を調べると、訳者の「癖」とは関係なく、間接話法が直接話法へ英訳される例が必ず散見されるのである。

2. 日本語の物語文中の「視点」の移動が原因であるという説

この現象とそれが生じる理由について詳述した最も早い研究は、E.G.サイデンステッカー・安西徹雄『日本文の翻訳』であろう。本節では、安西の主張を追っていきたい。

……一般的にいて、英語は日本語より間接話法を好む傾向が強い。(p.22)

.....日本語は英語より直接話法的な表現を好む傾向が強い。例の「視点の移動」の結果だ。
(p.85)

両言語を比較していえば、英語は間接話法を好み、日本語は直接話法を好むが、それは物語文中の「視点の移動」によって起こるという。補足説明を加えよう。物語内には、語り手(narrator)がいて、物語内のある視点(point of view)から物語を語っていると一般に言われている。英語の物語においては、固定的な視点、客観的な視点が存在するのが普通であるが、日本語の物語においては、視点の移動が英語と比べて自由であり主観的である、というのが安西の主張といっていいだろう⁴⁾。

この立場から、安西は、日本語の報告文、話法についてこう説明する。

つまり、話者が他人の言ったことを報告するとき、あくまで報告者としての客観的な視点を貫くのではなく(間接話法とは、つまりはこういう客観的な報告の仕方なのだが)、発言した人の立場に一体化して、その人の視点から、あたかも本人が今現に話しているかのような報告の仕方をするのである。

日本語の報告文では、発言者の立場になったり、また語り手の視点に戻ったりして、自由に視点が動く、と言っているようだ。そして安西は、川口松太郎「深川の鈴」から以下の一節を引用する。

「信公は小説家になりたがっているが、あんな勉強^{おぼつか}じゃとても覚束ない。商いでもしながら、長い時間をかければどうにか物になるだろう。お前も俳句の一つも作った事のある女なんだから、丁度好い。すし屋の仕事を教えながら勉強させてやってはどうだ、とそう言うのよ」

安西は説明を続ける。

全体がお糸という女性(主人をなくした後、すし屋をやっている)が、文学志望の「信公」という青年に、円玉という人の言った言葉を取りついでいる報告である(円玉は、この二人を結婚させたいと思っている)。つまり語り手として作者が、お糸の言葉を直接話法で読者に再現して語っているわけで、日本語では、こういうケースはそうめずらしくはない——少なくとも、別に異様とは感じられないけれども、英語ではこういう場合、円玉の言ったことは間接話法で示さざるをえない。

以上の引用例は直接話法であるが、視点が比較的固定されている英語では、間接話法で表すことになる。上記の引用文の英訳を安西は以下のように示す(下線筆者)。

“He said you wanted to be a novelist, but you didn't have much chance. He said you ought to have a shop, and maybe if you worked long enough at writing something might come of it. He remembered that I'd written a haiku or two myself, and he thought I'd just

be right. Well. Suppose I teach you to be a sushiya and let you study writing.” (p.86)

英訳では He said, He remembered, he thought という伝達部が加わった間接話法になっていることに注意したい。この安西の主張が正当であれば、英語・日本語の内的構造の違い——視点の違い——から、「英語小説一般では間接話法が多く使われ、日本語小説では直接話法が多く使われる」という仮説に行きつきそうである。この仮説の証明はこれからの量的研究に待たなければならないが、筆者が今までに英語小説、日本語小説を読んで受けた印象、および日→英翻訳の授業を担当した経験から判断すると、安西の主張は正しい。日英両語の小説における話法の頻度は、英語では間接話法が、日本語では直接話法が多く出現する、と断言してもよいと思う。

3. 日本語の話し言葉の特徴に原因を求める

前節でみたように安西は、日→英の文学翻訳において、直接話法から間接話法への転換が見られる理由を「視点の移動」に求めた。これは正しい主張と考えられ、筆者も同意したい。しかし、「視点の移動」だけがこの現象が起こる理由であろうか。このほかにも理由があるのではないだろうか。

筆者以外に正面から主張している論者を知らないが、日本語の話し言葉の特徴も、日→英翻訳の際に起きる話法転換の一因になっている可能性がある。

ここでは直接話法→間接話法ではなく、直接話法→直接話法の英訳例を見てみよう。この例を検討することにより、英語と日本語の話し言葉の特徴が明らかになるからだ。以下、E.G.サイデンステッカー・那須聖『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』から引用する。谷崎潤一郎『蓼食う虫』の一節である（下線は筆者）。

「お早う！」

と、肘掛窓の雨戸を一枚だけ開けて、彼女は子供に負けない程の声で叫んだ。

「お早う、——いつ迄寝てるんです？」

「何時、もう？」

「十二時」

「うそよ、そんなぢゃあないことよ、まだやっと十時頃よ」

「驚いたなあ、此のお天気によく今時分まで寝てゐられるなあ」

「ふ、ふ、——寝坊をするのにもいゝお天気よ」

「第一お客様に対して失礼ぢゃあないですか」

「お客様だと思ってるないから大丈夫だわ」

“Good morning.” She opened one shutter and called out in a voice quite capable of competing with Hiroshi's.

“Good morning,” Takanatsu answered. “How much longer do you intend to sleep?”

“What time is it?”

“Twelve noon.”

“You lie. It's no more than ten.”

“But how can you sleep on such a beautiful morning?”
Misako laughed. “It’s a beautiful morning for sleep, too.”

“But the important thing is that you’re being rude to your honored guest,” Takanatsu countered.

“Oh, him. He’s no guest. There’s nothing at all to worry about.” (p.8)

Translated by Edward G. Seidensticker

問題は、なぜ下線部のような語句が英訳では付け加えられているのか、ということである。
訳者であるサイデンステッカー自身の解説を引用しよう。

英文では、こういうところへ会話者の名前を挿入するのが普通である。この会話は高夏という男の客と、この家の主人要と、妻美佐子と、子供弘の間にかわされるものである。日本語ではいちいちどれを美佐子がいい、どれを子供の弘が話したかを明記しなくても、その内容とことばづかいで、はっきりわかる。美佐子は女性のことばを使い、弘は子供のことばを使う。その上美佐子は夫と客と子供に対してそれぞれの言葉を使いわけ。だから「美佐子はこういった」などと断る必要はない。英語でも男女、子供それぞれのことばづかいに、多少の違いはあるけれども、その違いは日本語ほど明瞭でないために、時折断らなければ、だれが言っているのかははっきりしないことがある。ここに “Takanatsu answered.” といれたのはこのためである。(pp.8-9)

もちろん “Misako laughed.” も “Takanatsu countered.” も話者の明示のために訳者が意図的に入れたのである。

『日本語らしい表現』の冒頭で、サイデンステッカーは『蓼食う虫』の英訳を取り上げた理由を次のように述べている。

日本語では、話し手の性別や大人・子供のちがいでことばづかいが変わってくる。相手によって使いわけ、夫や妻のように近いものと客との場合はおのづからちがってくる。こういう違いを英語でどう表すかの例である。

日本語の話し言葉の特徴 — それは男女、身分、年齢の違いなどによって言葉づかいが大きく異なることなのである。それが話法の英訳の際に問題になってくるのだ。

金田一春彦『日本語上・下』(岩波新書)は、データが古くなったところや、やや独断と思われるところもあるが、全体としてみると日本語の全体像を知るための格好の入門書である。その上巻で、日本語の話し言葉の特徴について以下のような示唆に富む記述がある。

.....このようなことは文学者にとっては日本語の長所で、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』の中に、あるフランスの作家が日本の作家たちをうらやましがったという話を載せている。

フランスの小説家が、大勢の紳士・淑女がサロンに集まったはなやかな場面を描写しようとする。あっちのすみから、ウィットィーな短い会話が飛び出したかと思うと、こっちのす

みからそれに答える警句が出る、一座が興じあう、そういうところを書こうとすると、どうしても、「……と一人の紳士が言った」「……と中年の老婦人が言った」と断り書きをつけないといけない。そうしないと、話し手がだれだかわからない。そこで、とにかく間のびがして、つい生き生きとした情景が死んでしまう。これがもし日本語ならば、いっさい断り書きがいらない。そこで日本の文学者がうらやましい、ということになるのだそうである。(p.18)

上記の引用文中の「フランス」は「英語圏」と置き換えてもいいだろう。金田一はここで西洋語一般と日本語を比較しているからである。さらに金田一は実例として、尾崎紅葉の『金色夜叉』の冒頭の場面を引く。銀行家の息子、富山唯継の指に光るダイヤモンドを見て、一同がどよめくところである。

ダイヤモンド
「金剛石！」
「うむ、金剛石だ」
「金剛石??」
「なるほど金剛石！」
「まあ、金剛石よ」
「あれが金剛石？」
「見たまえ、金剛石」
「あら、まあ金剛石??」
「すばらしい金剛石」

金田一は次のように解説を加える。

われわれ日本人はこれを読んで、どれが男のことばで、どれが女のことばだということが大体わかる。年恰好や身分まで想像がつく。そうしてそれが当たり前のことだと思っている。が、こういうことは西洋の小説ではできないのだそうだ。つまり、西洋では、男のことばと女のことばとは、文字で書くと区別がわからなくなってしまうからだ⁵⁾。(p.19)

4. 日→翻訳の授業での説明

翻訳の授業で、話法の翻訳について留学生に説明、指摘している実際例を一つだけお目かけよう。授業はあくまで翻訳の技術を扱うので、理論等の詳細な説明はできないし、説明している時間もない。しかし、日本語と英語の話し言葉の特徴とその違いを簡潔に説明しなければ、文学作品中に現れる話法の日→英翻訳を上手にこなすことは困難になるだろう。

以下は村上春樹「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」からの引用である（下線は筆者）。

ある日二人は街角でばったりとめぐり会うことになる。

「驚いたな、僕はずっと君を捜していたんだよ。信じてくれないかもしれないけれど、君は僕にとって100パーセントの女の子なんだよ」と少年は少女に言う。

少女は少年に言う。「あなたこそ私にとって100パーセントの男の子なのよ。何から何まで私の想像していたとおり。まるで夢みたいだわ」

下線部は日本語の小説では、省略可能である。無くてもかまわない。英語風の話法形式を使うのが、現代日本の一部の小説家や村上のスタイルなのだが、それ自体に必然性があるわけではない。作者の「スタイル」としか言いようがない。はじめの「驚いたな、僕は」「あなたこそ私にとって」というセリフを聞いただけで、男性の発言なのか女性の発言なのかがすぐにわかるので、「少年は少女に言う」とか「少女は少年に言う」という話者を明確にする語句は本来は不要なのである。しかし、英語では男性が言ったセリフなのか、女性が言ったセリフなのか明示しなければわからないことが多い。英語は日本語と比べるとそれだけ性差が少ない、ニュートラルな言語なのである。そのため、英語の直接話法では誰が言ったのかを明示する必要性がしばしば出てくる。また、話し言葉の途中で誰が言ったかを明らかにする必要性も出てくるのである。つまり、文の最後にhe said, she saidと置いて話者を明示すると、長いセリフの終わりまで、読者が誰のセリフかわからずイライラするかもしれない。かといって、いつも文頭にhe said, she saidと置くのはややawkwardである（スマートではない）。そのために英語の物語文では、発言の途中で話者を明示することがあるのだ。英訳を見てみよう。

One day the two came upon each other on the corner of a street.

“This is amazing,” he said. “I’ve been looking for you all my life. You may not believe this, but you’re the 100% perfect girl for me.”

“And you,” she said to him, “are the 100% perfect boy for me, exactly as I’d pictured you in every detail. It’s like a dream.”

日本語の原文では、下線部は不要であったが、英語では下線部がないと、誰が言ったのかがすぐにはわからない。まさしく「必然性」からこのような形式になっているのである。

以上の説明は、この小説を題材にして翻訳の授業を進める時、必ず触れるようにしている大切なポイントである。

5. 実例の再検討

では、1で取り上げた間接話法→直接話法の転換例を該当部分だけ再掲し、本稿の考察をもとに理由を考えてみよう。まずは『雪国』からである。

娘は窓いっぱいに取り出して、遠くへ叫ぶように、

「駅長さあん、駅長さあん。」

Leaning far out the window, the girl called to the station master as though he were a great distance away.

実は、「駅長さあん、駅長さあん。」は“Station master! Station master!”とは訳せない。英語では、乗客が駅長に向かって職名を呼びかけることはない。警察官に対してofficerと呼び

かけたり、大統領に対してMr. Presidentと呼びかけることはあっても、英語では職業やタイトルで相手に呼びかけることは例外的である。そうであれば、“Excuse me, sir!”とでもするしかないが、こう訳してしまえば、「駅長さあん、駅長さあん」という若い女性が遠くに呼びかける響きが台無しになってしまう。ここで「〇〇さあん」は若い女性の言葉づかいだと考えていいだろう（少なくとも年配の男性の言葉とは誰も思わないはずである）。小説の冒頭、しんと雪の降り積もる夜の駐車場で発せられた最初の言葉が、若い女性の澄んだ美しい声による呼びかけであったことは、小説『雪国』の基調となる大切な部分であるに違いない。が、英語ではこの「駅長さあん」の含みを直接話法で訳すことはできない。そのため間接話法にせざるを得なかったのだろう。

次は『斜陽』である。

「入院したほうが、……」

と私が申し上げたら、

I suggested that it might perhaps be better if Mother went to the hospital.

このコンテキストでは、「入院した方が、……」という曖昧なセリフだけで、若い女性の主人公か子孫の言葉であると察しがつく。それが日本語である。一方、英語で “It might perhaps be better for her to go to the hospital.” とそのまま直接話法で訳しても、医者か女性のセリフか即座に判断できない。そのため伝達部を最初に持ってくる間接話法で、発言者を明確に提示したと考えられる。

最後に「パン屋再襲撃」である。

妻が、「痛くない？」とか「トイレに行きたくない？」とか訊いても彼らはひとことも口をきかなかった。

She asked if the cord hurt, or if anyone wanted to go to the toilet, but no one said a word.

「痛くない？」「トイレに行きたくない？」は、このコンテキストでは女性の言葉と察することができる。夫と妻がマクドナルドに強盗に入った切迫した場面である。この時、被害者たちをいたわる女性言葉が発せられることにより、緊張が少し緩む。本気で被害を与えようとしているのではない、という意図が伝わってくる。そうした効果がこの女性言葉にはある。しかし日本語を直訳した “Does the cord hurt?” “Does anyone want to go to the toilet?” ではその効果が消えてしまう。この場面では、直訳しても原語が持つ女性言葉の柔らかいニュアンスが出せないのである。そのため訳者が、間接話法に訳したのであろう。

結論

それでは最後に「なぜ日本語小説の英訳では直接話法が間接話法に転換される場合があるのか」という問いに対する結論を述べよう。

英語が客観的な伝達形式である間接話法を好み、日本語が主観的な伝達形式である直接話法を好むのは間違いない。それは両言語の「視点」の違いという内的構造から来ている可能性が

高い。そのため直接話法→間接話法への転換がほぼ必然となる場合もあるようだ。しかし、この転換例の大多数を占めるのは以下のケースであろう。

訳者は日本文学作品の中に現れる直接話法をそのまま直接話法に英訳するのを原則としている。が、それでも、男女、身分、年齢の違いによって言葉づかいが大きく異なる日本語の話し言葉を、比較的ニュートラルな英語では十分に訳しきれない時が出てくる（そもそも英語には、フランス語などロマンス系の諸言語のように形容詞の男性形・女性形もない）。その時に訳者が自らの判断で直接話法→間接話法と転換しているのである。結局、間接話法を好む英語に訳されるわけだから、その転換がより自然な訳文の創出にもつながるのである⁶⁾。

注

- 1) E.G.Seidenstickerは『日本語の翻訳』の中で、日本文学の西洋語（英語）訳は、以下の態度で行われていると述べている。

...外国語の文学作品の日本語訳をみると、ほとんど例外なしに、また何の反省もなしに、具体的な内容の正確な訳出に重点がおかれている。それも、訳書の読者が原著を手に入れて、訳書と比較しながら、原著の文学的価値を鑑賞できる場合には、まだいいかも知れない。しかし日本の作品を英訳した場合、読者は大部分原著が読めないのであるから、そういう場合には、文学的価値の正確な訳出に重点をおくべきである。従来の日本文学の西洋語訳は、原則的にこのような観点から行われてきているといっている。(p.214)

- 2) 日本語には英語のような間接話法はない、と考える論者もいるが、本稿では日本語でも英語の「間接話法に相当するもの」が存在すると考えて議論を進めることにする。
- 3) 「三人はもう何を言っても無益だと悟ったらしく、黙ってされるがままになっていた」の部分は英語では訳されていない。これは、ある「効果」を狙って訳者が意図的に削除したものと考えられるが、本稿では論じない。
- 4) 物語文中の視点の移動は、日英両語の時制の問題にまで発展するはずであるが、本稿では取り上げない。
- 5) 英語の話し言葉でも男と女の言葉づかいには違いはある。男性が好む表現、女性が好む表現は存在する。しかし日本語ほど明確な性差がないのは事実である。
- 6) 男女、身分、年齢の違いによって言葉づかいが大きく異なる日本語の話し言葉の特徴は、ややもすると「差別」とか「文明の進歩に遅れている」と否定的に取られそうである。しかし、この言葉づかいの違いが日本語小説に豊かさをもたらしている可能性は否定できない。少なくとも日本語・日本文化教育に携わる者は、プラスの面を念頭において留学生に接するべきではないだろうか。

使用テキスト

川端康成 (1947)『雪国』新潮社

Seidensticker, Edward G (trans.)(1956). *Snow Country*, New York: Alfred A. Knopf

太宰治 (1950)『斜陽』新潮社

Keene, Donald (trans.)(1956). *The Setting Sun*, New York: New Directions Publishing Corporation

村上春樹 (2005)『象の消滅』新潮社

Rubin, Jay (trans.)(1993). *The Elephant Vanishes*, New York: Vintage

参考文献

金田一春彦 (1988) 『日本語 新版 (上)』岩波書店

E.G.サイデンステッカー・那須聖 (1962) 『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』培風館

E.G.サイデンステッカー・安西徹雄 (1983) 『日本文の翻訳』大修館書店

(おぐら よしろう 大阪府立大学教授、本センター非常勤講師)